

経済資料協議会創立40周年記念シンポジウム

—経済学教育と図書館—

1991年11月11日

早稲田大学総合学術情報センター

国際会議場

報 告 者	深井純一	(立命館大学産業社会学部教授)
	細川元雄	(京都大学経済学部講師, 経済資料協議会理事長)
	竹本文夫	(同志社大学人文科学研究所)
コメンテーター	三宅忠和	(日本大学経済学部教授)
	鈴木伸介	(東京経済大学図書館司書)

程島：皆さんお早うございます。本日のシンポジウムの進行係をつとめさせていただきます程島でございます。ご案内の通り、今日は経済資料協議会40周年記念行事として「経済学教育と図書館」というテーマでシンポジウムをおこないまして、それから明日は総会を開催することになりました。まず最初に当番校であります早稲田大学の高橋事務部長からご挨拶をいただきたいと思います。

高橋：ただいまご紹介をいただきました早稲田大学図書館事務部長の高橋でございます。会場校を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。本日は経済資料協議会創立40周年まことにおめでとうございます。40周年記念会場として、早稲田大学の総合学術情報センターをお選びくださったことを、大変光栄に存じますとともに、心から歓迎の意を表したいと存じます。『経済資料協議会の40年の歩み』を拝見いたしますと、戦後のまだ混乱期でありました1951年に創立され、そして今日までの40年の間には、越えなければならなかった山、そして渡らなければならなかった谷がいくつもあったことをうかがうことができます。その時代時代を関係のかたがたの大変なご努力と熱意で乗り切り、大きな成果をあげて、今日の隆盛を築かれたことに対しまして、心より敬意を表します。

早稲田大学は1982年に100周年を迎え、これからの100年に向けて、あらたな一步を踏み出したところであります。これからやらなければならないこと、改革しなければいけないことが山積しております。本日会場となっておりますこの総合学術情報センターは、100周年記念事業の一つとして建設されたものでございます。もう一つのモニュメントは、埼玉県の新所沢に建設いたしました人間科学部キャンパスでございます。このセンターは、図書館部分と研究施設と国際会議場の三部門で構成されております。それは図書館で収集、整理いたしました図書、その他の情報を研究のための資料として提供いたしまして、その研究の成果を研究室や会議場を使用して発表、生産をおこない、その成果を図書館に蓄積して整理し、提供するという基本的なコンセプトに基づいて建設されたものであります。おかげさまで会議場の利用もこの4月の開館以来、大盛況で、すでに来年分まで、かなりの予約

が入っていると聞いております。

名簿を拝見いたしますと、大学図書館からも大勢のかたがたが本日も参加されておられるようでありますが、21世紀になりますと、大学そのものが、社会の情報の基地になると予言されているかたもごさいます。しかし、それ以前に図書館が情報の基地として、これまで以上の役割を担うことになることは間違いありません。私どもは、ニューメディア、ニューテクノロジーを駆使した、きたるべき第3世代の図書館を視野にいれながら、第2.5世代の図書館を基本イメージの一つとして、この新図書館を建設いたしました。その意味ではまだ、インキュベータの中にあるといってもいいかもしれません。明日は、当学術情報センターをご覧いただける時間も用意されているようでございますので、何かお気付きの点がございましたら、遠慮なくコメントをおよせいただければ幸いです。終わりにりましたが、経済資料協議会のますますのご発展を祈念いたしまして、簡単ではございますが、私のご挨拶とさせていただきます。本日はまことにおめでとうございます。

程島：引き続きまして、経済資料協議会の会長であります細谷新治から、ご挨拶をいたします。

細谷：細谷でございます。本日はお忙しいところ、この40周年記念総会にお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。また、このシンポジウムだけにご出席されたかたもあるかと思いますので、そのかたにも厚くお礼を申し上げます。最初にこの40周年記念総会の会場をご提供くださいました早稲田大学の、ただいまご挨拶をしていただきました高橋事務長さんを初め、関係職員の皆様に厚くお礼申し上げます。実は、この会場をとるのはたいへんでございまして、やはり新しい図書館ということで、方々から利用の申し込みが殺到してございまして、なかなかとれませんでした。それを、高橋さんを初め、職員のご好意でとっていただき、この立派な会議場を使用することができてまして、私ども大変喜んでおります。

この記念総会は2日にわたりますけれども、今日は最初に40周年記

念シンポジウムとして「経済学教育と図書館」というタイトルでやらさせていただきます。何でこういうシンポジウムを持つようになったかといういきさつは肝心のシンポジウムの方が大事ですので、はしらせていただきます。とりあえず、皆さんにお配りした経済資料協議会のパンフレット『40年の歩み』がございます。これの冒頭に私が40周年を迎えてということで、私見を書きましたので、その後半（1ページから2ページ目）をちょっと見ていただきますと、だいたいご理解いただけたと思いますが、一番の原因は、新入会員の性格が変わったということとございます。いままで経済資料協議会というのは、もっぱら研究者にサービスするということを心掛けてやっておりましたんですけど、ここ数年の間に、経済学部ですとか、社会学部などの経済学を中心とした社会科学を持つ学部、あるいは学科を持つ大学の中央図書館が、どんどん加入してきました。

大学図書館は、いうまでもなく、研究と教育という二つのサービスを提供する機能を持っていますけれど、そこで、こういう会員のかたがたが沢山増えますと、協議会でも学生の教育という問題が大きなウエイトを占めてくるというようになってまいります。経済資料協議会は以前から、世代交代といいますが、次世代、第3世代にバトンタッチしていかなければならないのですが、これがなかなかうまくいきません。結局は私たちの責任ですが、そういうかたがたが育ってゆくためにはどうしたらいいかということを、私たちは日頃考えております。

ところで、いまの大学にくる大学生は、何の目的で大学にくるのか、よくわからない、大学に入るのが目的で大学にくる学生ばかりで、入ってしまうとさっぱり本を読まない、そういうお話も後で出ると思いますが、そういう学生のために、どうして経済学を教えたらよいかということで、大変苦勞なさっている経済学教育学会という学会がずいぶん前からできてまして、すでに7回目の大会をこの間、福島大学で開催しております。私は、そういう学会があるということを知りがいて、今日ご出席していらっしゃる中央大学の米田康彦先生にお話しして、40周年記念シンポジウムを共同主催でやっていただけないかとお願いしましたところ、先生は快くお引き受けくださいまして、学会の正式承認をとっていただきました。そこで、本日のシンポジウ

ムは経済学教育学会と経済資料協議会の共同主催ということになっております。

それからもう一つ紹介したいのは、大学図書館問題研究会（大図研）です。ここでは、ご存知の通り、主題専門家をどのように養成するかという問題について、非常に活発な活動をしております。その中心人物に今日、報告者になっていただく竹本文夫さんがいらっしゃいます。大図研は会としてのご承認を得たわけではないのですが、実質的には竹本さんが代表で出席されていると、私はそう考えております。そういうことでこれから時間の許すかぎり、活発な討論をいただきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。とりあえず、報告者とコメンテーターの方に壇上にあがっていただきまして、簡単にご紹介させていただきます。

一番右の深井純一先生は立命館大学産業社会学部の教授で、経済学教育学会のメンバーです。次は経済資料協議会の理事長の細川元雄さん。京都大学経済学部で講師で経済資料学担当です。次は同志社大学人文科学研究所の竹本文夫さんです。先ほど紹介しましたように、大学図書館問題研究会で活躍されている方です。

次にコメンテーターをご紹介します。

日本大学経済学部教授三宅忠和先生。先生はやはり経済学教育学会のメンバーでいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。

それから東京経済大学図書館の司書、鈴木伸介さん。経済資料協議会の代表としてコメンテーターになっていただきました。

それから、司会を今日は、中央大学の米田康彦教授と中央図書館の程島俊介さんをお願いしております。たまたまお二人が中央大学ということで、この司会の連絡はたいへんよろしいようで、私は安心しております。ではどうぞよろしくお願いいたします。 ・

— 第 一 部 —

司会：それではこれより経済学教育と図書館をテーマとしました記念シンポジウムを始めさせていただきます。座らせていただきます。始めます前に、今日のこれからのスケジュールについて申し上げておきま

す。予定としましては、これから約25分間位をめどに、報告者の各先生がたにご報告をいただきます。その後お二人の各コメンテーターの先生に、各15分位ずつコメントしていただき、そこまでで3時5分位をめどにしております。その後15分間ほど休憩をとりまして、まず、報告者とコメンテーターとの間で若干質疑応答していただき、その後、会場の皆様がたからの質問にお答えするという手順です。そして、4時30分が限度ですので、その辺で終わらせていただければと思います。その後、4時30分から、学術情報センターのかたによるNACSISのデモンストレーションが30分ほど、この会場でおこなわれます。それが終わりますから、会場を移しまして、ガーデン・ハウスで、懇親会を始めるというスケジュールでございます。よろしくご協力お願いいたします。なお、質問についてはお手元に質問用紙をお渡しいたしますので、休憩に入る前にお書きいただいて、担当の者に渡していただければと存じます。それでは早速始めさせていただきます。

初めに立命館大学の深井先生から報告に入らせていただきます。お願いいたします。

深井：ご紹介いただきました深井です。皆さまのお手元にレジュメ、「経済学教育と図書館探険」と『図書館探険法ガイドブック』という私の書いた冊子がいっていると思います。今日はこのレジュメ通りの話ではなく、少しはずれるかもしれません。私自身は農学部で農業経済の出身でありまして、私たちの分野では、図書館での文献の読書から勉強が始まるのではなくて、徹頭徹尾フィールド・ワーク、農村調査から勉強が始まります。私は農学部の中の農業史を専攻している恩師のもとで勉強したわけですが、歴史研究も、例えば、地主の文書を発掘してそこから研究が始まるということで、本来図書館から勉強を始めたタイプの人間ではありません。それで、私がそういう勉強をしてきたこともあって、学生たちにも、まず本を読めとか、何とか本を読む方向で宿題をだそうとか、そういうことは考えないことにしています。

最近の学生は本を読まない、と先ほども会長さんのお話にありまし

たように、そういうことはよくいわれておりますけれど、私は、人間というのは最初に活字に目を向けるよりも、最初に現実に目を向けるのが普通の順序だろうと思っておりまして、私も大学では学生たちに、最初に何とか図書館へ連れて行って本を読むくせをつけさせようとか、読書の楽しさを教えこもうとか、そういうふうには考えないことにしております。

今日の報告の最初にそういうことを申し上げるのは、はなはだ逆説的なのですが、私は初めに行動があって、現場に踏み込んで自分で事実を発見する、そしてその事実を解き明かそうとして考えたあげくに自分で答えがつかめないときに本を読もうかという気になる、こういう順序だという風に割り切っています。

ですから、私が今日お話しする図書館探険という話の前提として、私の立命館大学では一回生から（関西では、一年生といわず一回生といいますが）四回生まで、あらゆる機会を通じて、またどのような授業の形態であっても、できるだけ現場へ学生たちを誘い出します。一回生の基礎演習でも三、四回生のゼミでもその工夫をしてきたんですが、さて、学生が、じゃあ本を読もうかという気になったときに、いまの図書館の使い方がよくわからない。それで、なかなかやはり図書館に入りこめない、結局私の所に「何かいい本がないですか」といつてくる。しかし、僕はやはりこちらから本を教えてしまっでは、いつまでたっても図書館を使いこなすことはできないので、僕からこの本がいいよ、という形で教えてやったり、貸してやったりすることはなるべく控えることにしています。とにかく彼ら自身に図書館に行ってもらおうということで、いろいろ試行錯誤した結果、図書館探険という思いつきを始めることになったわけです。

ただそれをやってみまして気がついたことがあります。それは、私のレジュメの一番最初に書いてありますが、入学早々の学生に図書館利用についてのガイダンスを多くの大学がやっていると思うのですが、うちの大学でもやっています。多大のエネルギーを使って、すべての一回生をクラス毎にガイダンスをして、図書館の中を見学させております。それを一通りやるだけでも、私たちも授業時間を割かれますし、館員の人も大変な苦勞をしているわけですが、これが全くといっ

ていいほど効果があがっていないんじゃないか、大学の中にこういう施設もあるということを知ったという程度で、自分で図書館を使おうかというふうになかなかならない。それにはやはり、一番大事な前提条件が欠けているというふうに私は思いました。

それは、学生の側に自分が能動的に調べたい、勉強したいというテーマがなければ、図書館を積極的に、自主的に使おうということにはならないということです。試験が近づいたからというので、涼しい静かな場所を求めてとか、あるいは、あたえられた宿題をやっていく、また来週のクラスやゼミでレポートをしなければならないのでそれに必要な資料を探す、という動機で図書館へやってくるが、それはその場かぎりで終わってしまいますし、それは義務感からというか、自分があたえられた課題をこなすためにしょうがないからやる、こういうことから、やはり図書館好きの学生は生まれません。自分がやりたいテーマを先に持たせる、それを持てるように教師が授業の形態で様々な工夫をする。それがうまくいって、学生の中に自分の学習動機、問題関心ができたときに初めて、自分の足で苦労しながら文献を探していくという意欲とエネルギーが出てくるのだろうと私は思っています。

現在の大学の図書館ガイダンスというのは、このかんじんの手筈を抜きにやっているのです。あのように画一的なガイダンスをやるのなら、もう少し遅い時期にやってもいいし、あるいは、一回生のときにやるにしても、学生がそれぞれ調べたいテーマを持てるように、担任の教師と連携をとりながら、そういう手筈ができてから、図書館利用につないでいくということが必要だと思っています。

図書館探険という言葉は私の発見かもしれませんが。図書館探険の険は危険の険という字で、意識的に危険をおかして調べるという意味で使っているのですけれど、図書館というのは本当にジャングルだと思います。最近はコンピューターができましたけれど、やはり、基本的に図書館のシステムというのは、初めて勉強を始めようという学生にとっては、大変難しいシステムで、これになれていくには、自分で繰り返し失敗をしながら、そのノウハウを自分のものにしていく、あるいは、図書館のシステムを自分の頭と身体にたたきこんでいくとい

う過程が欠かせないものであると思います。ガイダンスで、閲覧室には何があります、図書カード利用はこういうやりかたです、コンピューターはこう使ってくださいというふうに教えても、やはり自分の物にならない。そういう意味では試行錯誤が欠かせない、それはまさに探検であって、探検は失敗がつきものである。

私の場合、このガイドブックを配りまして、単行本の搜索から始まって、大きな項目だけで7項目、最後は新聞記事ですが、この7項目に関して、自分のテーマをまず明確にした上で、探検のレポートを書いてもらっています。探検ですから、エピソードだらけのレポートが出てきます。一日中探しまわったけれど、本が見つからないとか、いろいろな話が出てきますが、失敗を恐れる必要はないし、私のレポートはその探検に失敗したからといって、点が下がるわけではない。失敗したら、なぜ失敗したかを考えて、失敗を避けるための手立てを考えてレポートを書いてもらうということにしています。この図書館探検によってすべての学生が図書館好きになるなんてことは絶対にあり得ません。いまのところ、成功率は4分の1位かなと考えています。その学生たちは、苦労して図書館が好きになった、図書館の仕組みがわかってきた、自分で本を探す苦労と同時に自分で本を見つけた喜びというのがわかる、こういう学生がやはり出てきているのではないかと思います。

ここで、今日お見えのかたがたには、大いに異論があるのではないかと思います。図書館に最近普及してきたコンピューターについてちょっとふれておきます。立命館大学でもコンピューターの端末機を学生が使えるようになっておりますが、これは図書館探検にとって非常に強力な武器が出てきたけれど、他方では非常に危険であると考えます。いきなりこれを使うと、図書館のシステムについて自分で体験的につかむことができなくなります。そして、学生が自分で文献を探していく、様々な文献の中で一番いいものを選んでいく、ブラウジングしながらいいものを探していく、こういうトレーニングが非常にやりにくくなると思います。そういうわけで、私はコンピューターが普及していくことに対して、痛し痒しというか、複雑な思いがあります。この『探検法ガイドブック』でも、コンピューター検索にたよるのは

最後の、どうしてもジャングルから抜けられない、このままでは命を落とすというときに限って使って欲しいということをいってあります。ただ、コンピューターというのは学生にとってとてもよいおもちゃでして、その誘惑は強烈です。最初にコンピューターを使うなどいってもなかなか難しくて、実際には先ほど私、成功率が4分の1といいましたが、4分の3の失敗している学生は、最初にコンピューターに引きつけられてしまって、使ってみると膨大なデータが出てくる、キーワードをしぼりこむこともできなくて、それだけで図書館に対する距離感がなかなか埋められなくなってしまいます。コンピューターを導入していない中小の公立図書館を訪ねたときも、途方に暮れてしまうでしょう。

ですから、図書館のシステムの中でコンピューターを、教育の面ではどのように使っていくのが一番有効なのか、研究者にとってコンピューターは絶対的に有効だとは思いますが、学生の図書館利用を勧め促していく面では、私はコンピューターの使い方についてまだ自分で確信が持てないのです。この点は、今日の他の報告者やコメンテーターのかたの意見も聞かせていただきたいのですが、私のような意見はおそらく異端であって、大半のかたは、コンピューターの長所ということに、非常に肯定的な意見を持っていらっしゃると思います。最近自動車教習所でも、オートマチックの車でいきなり教習を始めるところが増えてきているようですけれど、あれは、最後まで自動車のメカニズムがわからないまま運転するようになるのではないかという気がしてならないのですけれど。たとえばいいかどうかかわからないですけれど、やはり、原始的な苦勞をしたほうが、基本的なことをマスターできるという点では、職人の世界の徒弟修行と共通する面があるのではないかという気がしてなりません。

それから、最後の方に書きましたが、立命館大学では、図書館の中にビデオルームがあり、ビデオのストックを持っています。それは劇映画とドキュメンタリー映画ですけれど、端末の受像機で学生たちが自由に見られるシステムになっていますが、これは私は授業にもどんどん使っています。読書が嫌いだからそのかわりにビデオを見せようというのではなくて、私のように行動から読書に入る、現実を見る

ことから読書に入るという道順を組みたいというものにとってみれば、常にすべての学生を現場に連れていくことができないという場合に、ビデオから読書に向かわせるという意味ではとても有効だと思っています。ビデオをただ見せるのではなくて、ビデオを見せたときにはかならずレポートを書いてもらう。それを書くときには、ビデオを見て、直感的に何かを感じたことをまとめるだけでなく、そこで本を読んでみようという方へつなげることを試行錯誤しているところです。外国の公共図書館ではビデオがかなりのウェイトを持つようになりましたが、私は大学図書館でもビデオをそろえて、それと読書をつなげるということは、とても大事だと思います。

それから最後に、私は図書館学の専門ではありませんし、さっきもいいました通り、自分の自己形成の過程といえますか、あるいは自分の研究において、自分自身では図書館をそれほど使う人間ではないのですけれど、私がこういうことにとり組んでみようと思ったきっかけはやはり、現在の大学図書館では、実際に大学でおこなわれている授業、クラスやゼミの教育の中身と切れたところで、図書館の運営、図書館利用へのガイダンスがおこなわれていると考えたからです。これは図書館の側にも責任があると思いますけれども、それに勝るとも劣らず、教師の側に責任がある。自分の授業の中で、学生を読書へ、そして、とりわけ図書館利用へといざなっていくための努力と工夫が教員の側に決定的に欠けている、という反省をしています。私のやり方は私の学部の同僚には広く伝えてありますし、学内全体に向けてもいろいろな機会に書いてきましたけれど、教員の側から、学生を図書館に向かわせる努力というのは、ほとんどされていないのではないかと思います。私の『ガイドブック』を使わせてくれといってきた教員は私の大学に2名だけおりますけれど、その程度です。まったくちがったシステムで一向にかまわないんですけれど、とにかく、そういう努力を教員がしているケースというのは聞いておりません。

いまの学生は本を読まないと嘆く人たちが、そういうことをやろうとしないのは、非常に悲しいことだと思います。私のように思いつきでささやかな努力をしていたものが、こういう晴れがましい場に引っ張り出されるのも、そういう実践例が少ないからだろうという気がし

で残念です。もっとよい実践例が多々あっていいと思いますけれど、それが無い。私自身はこういうことをひとりよがりにならないように、親しい図書館の職員の人に改訂版を出すたびに内容をチェックしてもらったり、相談をしたりしているんですが、まだまだ個人的な思いつきの範囲にとどまっていると思っています。そこで私は、この大学図書館問題研究会とか、経済資料協議会とか、図書館の運営に専門的にたずさわっているかたがたと私たち教員とが連携して、学生をどうやって図書館の日常的な利用者にしていくか、彼らに図書館利用の面白さを教えてあげて、在学中に図書館を徹底して使いこなして卒業してゆく、そして、将来、市民になってからも公共図書館に足しげく通うような、そういう市民を作りだしてゆく、そういう教育をする大事な役割を背負っていると思います。このシンポジウムをきっかけに、私もいろいろ教えていただいて、またよりよい試みをしていきたいと思っています。

司会：続きまして、京都大学の細川先生をお願いいたします。

細川：私のレジュメは柱だけしか書いておりませんので、ここでこの項目にそって私が日ごろ考えていることを述べたいと思っています。私は30年近く、経済資料（図書を含めて）の収集、受け入れ、整理、運用というライブラリアンの仕事をやっており、いまでも続けております。そして、やがて数年後に停年退職いたします。実は以前からあったわけなんです、今日細谷会長がこのシンポジウムに、われわれの後、経済資料関係に従事している専門職員をどのように養成するかという問題を出されました。そこで今日は、この問題に答える解決策を探るための討論資料を提供するというつもりで、思い切って、私のいまやっている仕事を話してみることにはしたいと思っています。ですから、いまお話のあった深井先生の図書館利用に結びつけた経済学教育という観点からは少し外れるかと思いますが、その狙いは、経済学の研究活動に結びついた経済資料の専門職員というものの存在理由を明らかにしておきたいということでもあります。

実は、私は5年前から「経済資料調査論」という名称で特別講義を、

大学院生と学部三・四回生を対象に開講しております。また、京都のある理科系の短期大学で、一般教育科目として経済学を担当しております。ですから、本日のテーマ「経済学教育と図書館」は、身をもって体験しているところであります。京大では経済学に関する図書館教育ということ、短大では経済学の入門教育ということ、この二つの観点を結びつけるものが出てこなければならないのですが、いまの私には簡単に答えが出てきません。そこで前者に重点をおいてみると、経済学を主題とする専門図書館員のあり方という問題が出てきます。私は、他の報告者と視点がずれるかと思いますが、この問題にポイントをしばって、時間の許す限り話を進めさせていただきます。

大学図書館は、研究所図書館を含めて、いうまでもなく研究図書館という機能をもっています。ここでの図書館員は研究スタッフのかたがたの研究活動に接点を求めるということであり、主題に対する専門知識を持つということでもあります。問題としてはこの専門職員の制度化と育成ということでもあります。自分のことで恐縮ですが、先人の業績をビブリオ、いわゆる書誌によって検索し、研究者に提供しているわれわれを資料屋といっております。それに対して先生がたは、経済学の第一線に立って研究課題を見つけて、それに向かって研究を開始する。その研究活動に参加するということがわれわれに要求されているのではないかと思います。実は、われわれの課題ということでは、約20年ほど前になりますが、元甲南大学学長の杉原四郎先生が書誌についてこういうことを書いておられます。その書き出しを少し読ませていただきます。

「自分の研究成果ははたして学界に公表するに値いするだろうか、つまりその中には何らかの独創性または新しさが含まれているかどうか。この問題に対して研究者は、同じ主題についての先人の業績を書誌によって検出し、それを逐一吟味したうえではじめて、自信をもって解答することができる。」とプロの研究者の仕事に占める書誌の大切さを述べ、「この点に関するわが国の研究者の認識のレベルは一般的に決して高くないと私は思う。」

そして、「入学時に大学院の新入生を図書館につれてゆき、現場で閲覧規定や書庫の中の模様や特殊コレクションを説明し、レファレン

サービスやマイクロリーダーや複写施設などについても解説することは、多くの大学でおこなわれている。旧制大学院時代にはそういうこともなかったから、それは戦後の一つの進歩である。だが数時間で済むこうした一般的なガイダンスをもう一步進めて、各研究科ごとに、教師または図書館員が書誌の所在や利用法についてまとまった解説をしている大学が、わが国にどれだけあるだろう。」といわれ、「もしわれわれが書誌の重要性を本当に認識しているのなら、こうした事態を放置すべきではないだろう。しかし誰が書誌の講義を新入生にするのか。現在では学問が細分化しているので、自分の専門分野に関しては書誌の所在や利用法についての見当はついて、たとえば経済学一般、さらに社会科学全般にわたる書誌の講義となると、その担当者を研究者に求めることはむづかしい。といって図書館側にあるかといえ、それに応じる有能なレファレンサーをかかえている大学図書館は、そうザラにはないだろう。」そして大学図書館はこのような人物を制度的に養成される仕組みにもなっていない。「書誌と研究者とが有機的に結合するためには、すべての大学に、すくなくとも大学院をもつ大学には、必ずこういう講義ができる人物がいなくてはなるまい。」と提起されています。（『読書燈籠』未来社刊より）

私は日ごろから、杉原先生の主張をモットーにしており、いま図書館教育の目指すものとか、求められている専門職員とかという問題については、具体的にこういう点を中心として考えております。

そこで私のお配りしたレジュメの「1. 資料室（研究室）の機能の発展と危機」という本題に入ります。ここで私のいいたかったことは、いま自分が勤務している京都大学経済学部調査資料室が、いわば杉原先生の望まれるような専門的なドキュメンタリスト、レファレンサー、いわゆる資料屋を養成するような仕組みになっている機関であるかどうか。そういうことを制度的に問う事例として、a) 戦前期「調査室」の存在、b) 戦後期の設立と発展、c) 制度化ならず、d) 現状、という四つの柱をあげたわけであります。

まず戦前、京大の経済学部が創設されたところから、事務室とか図書室とかと別に、研究室的な機能として「調査室」という組織が助手1名を配置して存在しておりました。戦後はその調査室が経済資料調査

室（のちの調査資料室）という名前で再発足しております。この二つの組織は、それぞれ当時の学部の研究教育体制にかかわって特徴的な仕事をしているわけであります。戦前はいわゆる演習制度（ゼミナール制）というものがあり、そこで経済時事問題を学生と一緒にやるということになっており、ゼミナールに必要な新聞切り抜きが、調査室でおこなわれていた。少し調べてみますと、調査室には新聞切り抜きや資料を扱う専門の助手がいたようであります。戦後は学部のスタッフによる共同研究体制が生まれ、そこで大学院生を加えた研究の組織化、資料の収集や科学研究費をもらって調査に行くなどのシステムができました。調査資料室は、それに応じた事務局的な仕事と少しだけ中身に入った仕事をするということになりました。

このような仕事の内容が、研究体制の発展にともなって変わりました、特に最近の研究メディアの進歩にともなって大きく変わってきつてあります。そうすると、それを担う資料屋の問題が出てくると思います。私たちの先輩は資料屋ですと通さず、途中で教員に転向していく人、あるいは事務職にいつてしまう人たちのように、次々と大学内の配置転換で別の職種に変わっていく人たちがおります。資料屋という職種は、戦前には研究室の助手や副手、院生などにも課せられた仕事と聞いておりますが。いずれにしても、私は30年間そこにとどまってやっております。十分な総括はできていませんが、これがいいだった第一点であります。

もう一点は、その時々の学部のスタッフ、教員が、書誌作りといったことを含めて資料活動に対してどれだけ理解があるかということです。戦前には書誌学者として有名な天野敬太郎先生が京大経済の図書室におられました。それから、戦後はこの調査資料室が経済資料協議会に参加して、『経済学文献季報』の創刊当時の編集センターを担当したということも、いわば教員の書誌活動、資料活動に対する理解があったからだと思っております。しかも、私自身が「経済資料調査論」という講義を短い時間でありますが、やることができたのも、そういう理解と要請がいわば学部から出てきたからです。

しかし、組織としての実体は、講師と助手の2名しかおりません。あとはアルバイトです。もしそれが学部付置の文献センターというよ

うな研究施設に制度化されていれば、少しは将来の保障もされるということになります。制度化が難しいということになりますと、はたしてこれからの調査資料室に私たちのような資料屋が存在できるかということになります。危機という字句を使ったのは、そういう心境を表現したつもりであります。

そこで、「2. 専門職員の仕事～経済学における研究・教育と図書・資料を結びつける役割とは何か」に移りますが、ここでは、a) 資料収集活動の変貌～文献調査・文献発掘へ、b) 教育活動、c) 専門職員の独自の仕事、という三つの柱をたてました。すでにふれましたように研究メディアの発展によって、文献調査の中にはオンライン検索という仕事までが出てきたというふうな変貌を指摘しておきたかった。教育活動というのは、本来個別的なレファレンス活動というところに重点をおいています。私の調査論も毎年15名位受講しますので、ゼミナール形式でやっております。しかし、この話は時間がないので省略させていただきます。

最後に結論として一言。専門職員の独自の仕事というのは、書誌作りにつきとを考えております。そのためには、最初にいいましたように、研究の最前線に立つとか、研究動向をじっくり見極めて、テーマを選ぶこと、そして教員となるべく共同しておこなうことが大事かと思っています。専門職員ははたして存在するかということを私はいいましたが、教員の個別的なエゴに惑わされず、学界に位置するような形で、われわれ独自の書誌作りの仕事、たとえば『経済学文献季報』のようなものを活発におこなうことが専門職に課せられた大事な仕事だと思っています。以上が私のいいたかったことであります。いい足りないこともあります。時間の関係上これで終わらせていただきます。

司会：ありがとうございました。それでは、続きまして同志社大学の竹本さん、よろしくお願いします。

竹本：僕は卒業した学部が文学部でありまして、そして中央図書館の整理を10年、閲覧を10数年経験しまして、現在は人文科学研究所という

所にほうりこまれています。経済学のことはしたがって何もわからないのです。だから、経済学にかかわるお話は何もできません。深井先生が、図書館をジャングルといい、図書館探険といわれましたが、その通りで、図書館というのは非常に複雑なんですね。僕は図書館に勤め始めて最初のころ、アメリカの国会図書館の館長だったマーガレット・マンという人の目録分類入門という本を読んだのですが、その中で図書館というのは、どうしても複雑にならざるを得ないといっています。例えば、ジョン・スミスという人名をアメリカの国会図書館で、カード目録でしらべると、厚さが何センチにもなり、同姓同名の人が十数名もいると。しかも同じ研究分野の人もいます。これだけの人が集まっている目録をどうしてそう誰にでもわかるように単純に構成することができるか。

図書館というものは、本質的には量との闘いだ。つまり、少なければなんでもないことが、膨大な量が集まるために、いろいろな問題が生じてくるのだ。だから、著者をならべるだけでも、同姓同名あり、不完全な姓名あり、それから、アメリカのナショナル・ユニオン・カタログの初めの所を見ればわかりますが、記号だけの著者が多分、数ページならんでいるのです。これは恐らく、中世の時代に、うっかり実名を出すと火あぶりになるということもあって、わざわざ匿名で本を出したと思うのですが、あるいは、何らかの理由で匿名が必要で、下手にペンネームをつけても、憶測をされるという危険性から記号にしたということもあるのでしょう。記号あり、不完全の姓名あり、同姓同名ありと、そうすると著者の目録を作るのも大変で、何にもそのことを知らない人が著者目録を調べるわけですから、そういう何にも知らない人でも引けるようにするにはどうするか、そこから彼女は、目録規則の必要性ということをいうわけです。アメリカでは、どうしたら学校が図書館を利用できるかということのを、小、中、高と段階的に教えているわけです。ところが日本ではそういうことを何もやっていないわけですから、先生がたといえども、かなり妙な教え方をしている場合があるわけです。

多分同封されていると思いますが、大学における教育と図書館について、「図書館員からみた教員の実態」というテーマで『図書館界』

という雑誌に少し書きました。深井先生は教員から見た図書館という視点でお話しされましたが、逆にわれわれから見た先生という視点で書いてあります。後ほど見ていただきたいと思います。現在までに約50人位の先生に1人、大体1時間から3時間ぐらいの時間をとりまして、しつこく授業内容などいろいろなことを根掘菌掘聞きましたが、そこでわかったことはほとんどの先生がたは図書館を知らないということで、これが正常な姿だと私は思っております。例えばゼミその他でこういう本が必要だからそろえてくれという要求がきます。だいたいその半分は図書館にすでにあるんですが、しかし、先生がたは調べもしないで、ないと思って要求されるわけです。

それに先ほど紹介したマンのいい分以外に、日本あるいは同志社の図書館特有の複雑さもあります。歴史が長いものですから、旧分類目録というのがまずあるんです。それから新分類目録、さらに1982年以後のデータはすべてコンピュータ検索になっていて、カードに入っていない。そこで3種類のものを調べないと、ないということは確認できないわけです。しかも、その3種類の目録が正確であればという前提での話であって、実際はどれも必ずしも正確とはいえないというわけですから、そのいずれかを見ても、実際はあるのに、ないというケースも十分起こり得るわけです。

先生にしてそういう状況ですから、学生については推して知るべしということです。しかし、いろんな状況から図書館に対する要求は非常に全般的に厳しくなってきたと思います。先生がたも忙しい中で教育をより効率的におこなうために、図書館がもっと機能的に充実することを求めておられますし、社会的要請もあります。そういう状況の中で同志社の場合は、特に新しい図書館を建てた後、図書館が立派になったということで、内容に対する要求が非常にシビアに始まりました。例えばその事例を紹介しますと、労働組合の大会で図書館員および図書系職員に対する不満、要求がしばしば語られる、ついに労働組合の中で図書館問題特別委員会というのが設置されまして、何期か継続されました。最終的には学生へのアンケートを労働組合としておこなう、先生がたは自分の講義またはゼミで学生に配布して回収する、図書館は入館者に渡し、出るときに回答を箱に入れてもらうと

いうことになりました。図書館の入口で学生にアンケート用紙を配ったのが先生だったものですから、いまの学生は非常にちゃっかりしていて、先生がかかわっていることはちゃんと応えないとひょっとすると損をするかもしれないということでも考えたのか、不特定多数の学生、入館者に渡したのですが、その9割が回収されました。授業で配布したものはほとんど全部回収されました。その中にいろいろな項目がありましたが、本がわからない、あるいは入手できない、または何を読んだらいいかわからないときに、誰に聞きますかという項目がありました。1番が先生、2番が友人、3番が云々という質問だったんですが、1番に丸を付けた学生は5%にも満たない数でした。これにはわれわれも非常に驚いたんですが、先生に聞くのは最後なんですね。なぜそうなのかはわかりませんでしたが、意外に先生には聞かないし、図書館員にも聞かない。学生が聞いているのは友達、先輩、本屋さんですね。

そういう状況がこの調査でわかりましたが、メインテーマというのは先生の問題でして、先ほどもいいましたように、先生がたが図書館を知らないんです。ところが学生に図書館を利用させるために最大の力は何かといいますと、これは僕の経験では決定的に先生なんですね。先生が図書館を利用させようと思って授業をしているクラスの学生は、確かに非常にたくさん図書館にきます。図書館員がいくら頑張ってもいろいろなメディアを使って宣伝しても、率直にいいまして効果はそんなに大きくないんですが、先生がたがその気になると非常に大きな効果があるんです。日本で、特に大学図書館や学部の図書室が十分に利用されていない原因の一つは、僕は先生がたにあるのではないかと考えています。

先ほどもいいましたように、社会科学系の先生はほとんど図書館にきません。だから、何があるかを知らないのはもちろんなんですが、建物の中がどうなっているかをご存じない先生も結構います。それは恐らく図書館側にも責任がありまして、先生がたが必要とする資料は、中央図書館とか学部図書館・室にはあまりないという、それが一番大きな原因だろうとは思っています。したがって、研究者のニーズにも応えられる蔵書構成をとらなければいけないのですが、予算上の措置

もあって、容易にはできないんです。しかし、先生がたにとって何らかの魅力のある図書館を構築する必要があると思っています。

基本的には、いかにして先生に図書館にきてもらうか、これが図書館利用を促進する始めの終わりだろうと思っています。先生がこないのでは仕方がないので、僕が先生がたの研究室を訪ねて、一人一人に内容を伺ったんです。その中で図書館を知らないし、図書館員に対する期待を持たないからでしょうけれども、2時間近く懇談した後、図書館に対して何か不満や要求はありませんかと聞いても、ほとんどの方が答えませんでした。まれに要求を持っているかたもおられますが、遠慮してなかなか口を開かないという傾向があります。したがって深井先生のようなかたは、突然変異的発生といいますか、極めて希少価値のある先生です。図書館員よりも図書館をよく知っているのではないかと思います。この『図書館探検ガイドブック』という冊子を見て非常にびっくりしているんですが、素晴らしいガイダンスだと思います。しかしこういう先生は突然変異的にしか存在しませんので、正常な存在ではないと思っています。

したがって、われわれが先生のところへ足を運んで、先生がたの実態を聞き出し、そして先生がたがおかれている条件についても、職員が理解する必要があるということを、たくさんの先生に接して思いました。先生がたはとにかく非常に忙しいんですね。膨大な雑用その他にとりかこまれ、真面目な先生は大概いつも何らかの焦燥感にかられて生活をしている、というのが感想でした。その中で、学会等では何の業績にもならない教育にエネルギーと時間を割くというのは、とても大変なことだと思うんです。しかし実際には、真面目な先生がたは非常な、想像以上のエネルギーを割いているということを知りました。

この『図書館界』の雑文にも書いておいたんですが、私の大学の工学部の工業化学の先生ですけれども、大学院にいたころから非常に注目されていて、その分野では日本で3本の指に入るといわれ、将来、世界の学界に君臨するであろうと予測されたかたなんですが、不幸にして私立大学の同志社というところに就職されました。私立大学というのは非常に、特に工学部は研究条件が悪い、それから労働条件は著しく悪い。国立大学、特に京都大学とか東京大学だったら職員が

やる仕事を、ずいぶん先生がやっています。化学ですから、物理的に時間が絶対必要なんですね。実験を積み重ねて、データを積んでいかないことには研究が進まないわけです。ところが、その実験をする時間がなかなかないということで、ノイローゼに陥ってしまいました。世界の一流の学者になろうという野望に燃えていた若き研究者が、とにかく研究時間がないということで、本当にどうしようかというところまで追い詰められたんですが、何で救われたかといいますと、授業なんですね。

授業で学生に必死で教えると、だいたい3割位の学生の半分は、ほうっておいても勉強する。残る半分はいくら手をつくしてもなかなかマスプロ授業ではどうにもならない。しかし残る7割は、自分の熱意と準備いかんで伸びる。その学生に1年間講義をしていくことが最大の救いであり、その中で自分はノイローゼから立ち直った。そして、今度は、どうせ研究の方は駄目だから、教育の専門家になろうと思って努力をしたけれども、やはり、研究者として一流になろうという迫力を持たないと講義に学生がついてこない。つまり、なれなくともなろうという緊張感、講義の中だけではなく自分の全生活のシビアさを講義で学生に全力投球でぶつける、その中で学生が変わるんであって、テクニクではないということに気付き、また、もともと研究をしたいわけですから、必死で研究と教育に打ち込んでおられる。この矛盾は絶対に解消しないといっておられました。

そういう先生がたの努力を見たときに、ライブラリアンというのは、もっとシビアナ仕事の仕方が必要ではないか、少なくとも僕自身は非常に甘かったというふうに思いました。それから、図書館の利用を促進しようといいいながら、一方で図書館というのは絶えず延滞図書が発生しますから、延滞請求を出します。学生がきたら二言三言説教もする。学生に聞いてみると、本の返却が遅れたときに偉そうに説教する奴がいるんで、俺は二度と図書館にはいかないということを何人かから聞きました。そこで、もう図書館を出て数年経ちますのでいまはどうなっているかわかりませんが、僕らのところでは、確かに延滞を減らす必要はあるので、野放しではいけないけれども、特にひどく遅れてきた場合には、説教ではなくて、大学全体あるいは学生全体の共有

財産である図書を、ルールを破って自分が勝手に持っていることを、本人がどう受け止めているのか、という自覚を促す助言をするようにしました。少なくとも決して文句はいわないようにした。実際にはちっとも自覚をしてくれないのでうまくいきませんでしたけれども、説教はしないという意味統一はしました。督促は頻繁に出しますけれども、注意をする場合でも、図書館に二度と行かないという思いはさせない、図書館は少なくとも気分のいいところだという気にさせたいと思っています。

散漫にお話をしましたが、図書館員の専門性という問題についてお話しします。例えば、たまたま経済学部図書室に配転されるというような、図書館員にとって必ずしも自分がその分野を専攻したわけではない、あるいはその分野の専門家になろうというわけでもないのに、そういう専門知識が要求されるということがあります。そういう知識の獲得ははたして可能かという問題です。これについては、必ずしも合理的な方法は現在ないように思います。これからそれを作っていくべきだということです。アメリカでは、各分野ごとにライブラリアンあるいはライブラリアンと専門家の共同著作によるライブラリアンのための入門書、そしてその中には、さらに勉強したい人のための文献目録や指針がそこに与えられているものがあります。日本にはこういうものはありません。そういう方面について追求をするという傾向も、いまのところ図書館学の中にはなさそうに思います。したがって、経済資料協議会とか、経済学教育学会あるいはその他の図書館の団体などが、お互いに協同してそういうものを作っていくかと思いません。もう一つは、とにかく毎日毎日カウンターでいろいろな知識を要求されますので、そのためにはぜひ図書館員にもわかるような、解題付きの書誌を作りたいと思っています。これが各分野ごとにそろえると、図書館員は非常に仕事がしやすくなると思います。

とにかく、図書館員だけでできることは大学では限られています。大学は教育、研究の場ですから、身分の上下ではなくて、機能的にやはり教員が絶対的な中心になります。したがって、教員との協力・協同の中で先生がたに教えてもらったり協力してもらったりして、図書館の利用を促進し、また図書館員の勉強のための主題別のツールも作

っていく。現状ではそれを追求していく以外に道はないだろうと思っています。以上で終わります。

司会：どうもありがとうございました。時間の方は報告者の先生がたにご協力いただきまして順調に進んでいるようでございますので、このまま続けさせていただきます。報告はこれで3先生が終わりましたので、この後コメンテーターの両先生からコメントをしていただくことにします。それでは初めに、日本大学の三宅先生、よろしくお願いします。

三宅：ただいまご紹介いただきました日本大学経済学部の三宅です。私は深井先生とちがって、フィールドワークの方からというよりも、理論経済学を専攻しておりまして、その中でも特に近代経済学の方からアプローチするということで、いわば中心的な本が一冊あれば、あとは何とかという感じなもので、あまり広く図書館利用というのをやっていなかったんです。最近は産業組織論を、理論経済学の応用分野として、位置付けながらやりだしましたので、産業の実態にも関連するようになって、相当資料を利用するようになったんです。いずれにしても今日の3人のご報告者に全面的に賛意を表明するし、基本的にはほとんど同じ見解を持っております。特に深井先生の場合の教員の役割、あるいは竹本先生の場合の、学生に対して図書館へ足を向かせるという重要性についてもよく認識しております。

私は経済学教育学会の方からという話ですが、経済学教育学会の大会で、いままでどういう形で図書館の問題が取り上げられたかを調べてみました。一つには、3年ほど前深井先生が今日と同じように図書館探険ということをして、大規模教室の中での重要性という点から報告されております。それから、86年の第2回大会ですが、岡山大学の神立春樹先生が図書館をいかに学生に対して案内し利用させるか、あるいは一緒に行って資料を探し、そして自分たちも利用できるようにするかという報告を、教育と経済学の実践というテーマを課しながらやられております。図書館を全面的にではなく、経済学教育の中でその一部としてとりあげた報告があるわけです。そういった意味では竹本さ

んがいわれるように、非常に珍しいケースでありました。

このシンポジウムに出るに当たって他の先生にも聞いてみたんですが、やはり括弧付きの期待通り、ほとんど図書館というものを教育の中に位置付けておりません。ほとんどが自分の研究中心で教育と図書館との関連をあまり考えていない、私もいままでそうであったからあまりいえないんですが。私自身は卒業論文やレポートのときに図書館に学生と一緒に رفتったりしたことはありますが、今年の夏、大図研のパンフレットに何か書いて欲しいという要請があって、少し書いたことがあります。それからやっと目覚め始めたというところですよ。そういうことを考えますと、私たちが普段学生は本離れしているし勉強しない、あるいはレポートの内容がまずいというようなことを嘆く前に、私自身あるいは教員自身の反省や意識革命を図るものとして今日の深井先生のご報告や、こういったシンポジウムでの問題提起自体が非常に重要な役割を持っているだろうと思います。少なくとも私は、いままでの見方がまずかったなと思っているわけですが、一人だけでも変わったという意味で、このようなシンポジウムが持たれるということに非常に大きな位置付けをしてもいいと思います。今後もこういう会が開かれることによって、多くの人がこのように感じていくということを望みたいと思っています。

私は、コメンテーターを引き受けるに当たって、学生の利用実態というものを知らなかったものですから、学生にアンケートをとってみました。これは日本大学経済学部2年、3年、4年の学生、あるいは私は留学生を担当していますのでその留学生、それから二部（夜間）の学生、大学院の学生、それから別の大学にも教えに行っておりますので、その短大の1年生といった、大体300人位ですが、アンケートをとってみました。その結果、私はあまり利用されていないのではないかなと思っていたら、正直に答えたかどうかは別にしても、意外にかなりの利用者がいました。300人中まったく利用していないのは5、6人しかいなかったということで、これならばまず足を向けさせるということ、もう少しテコ入れすればいいかなという気がしました。

その中で、ゼミに加入している学生の方が利用しているか、あるいは

は加入していない学生が利用しているかということを見てみますと、どうやらこれはあまり関係ないようです。ゼミに未加入の学生が少ないということもあって、授業に熱心に出てくる学生は図書館もよく利用するという、若干予想していた答えとは違っていたわけです。

そのほかに場所だけ利用するのか、どういう形で利用するのかということを探ねてみたんですが、ご承知のように日本大学の経済学部というのは町の真ん中であって、キャンパスも何もありませんから行くところがない、例えば暇つぶしとか昼寝とか、自分の本を静かに読むためとか、図書利用ではない図書館の利用が、これはダブっていてもいますが、31%位ありました。しかしながら、今日の深井先生の報告や、あるいはそのほかのこととも関連しますが、利用する一番の原因は何かといいますと、90%以上の人がレポートを書くために利用すると答えております。ということは、やはりわれわれは嫌がられてもレポートを、まあこれは出し方にもよりますが、しつこく出すということは必要であろうということがわかります。

それからその次には試験勉強のためというのが60%位いましたけれど、これはダブル回答も可能なので、そういう数字が出たわけですね。それから特徴的なことは、ゼミに入っている学生は調べ物をするためというのが、試験勉強よりさらに多い66%で、ゼミに入っていない学生は調べ物をするという部分がやや少ないということがあります。もう一つ、二部の場合は、これは客観的状況なんでしょうけれど、利用が少ないかと思ったら非常に多いんですね。というのは現在の二部の学生というのは、勤めながらというよりも、一部に移りたい学生が多いということがありますから、早い時間にきて図書館を利用しているという形態が多いようで、ほとんど一部と変わらない利用者数でした。

それから短大ですが、この短大は少し田舎の方にある短大なので、利用というのは普通に行き場所がないので、授業の合間の利用が多いということがわかりました。やはり立地条件が影響するようです。特に学内に新しい食堂ができたなら利用の仕方がガラッと減ったということがわかりましたが、そういうことを見ると、若干ながら場所的利用というものが考えられているだろうと思います。

それから利用しやすいかどうか、新設だったかどうかという質問に

は、ここには日大の図書館の人もおられるからいいにくい部分がありますが、結果としてあまり心配することはないで、利用しやすいというのが31%、普通だというのが53%、利用しにくいというのは10%弱でした。短大の方は逆に非常に利用しにくいという、これはあまり伝統がないからかもしれませんが、蔵書数やその他も形式的に集めたようなことがあります。したがって物理的条件が満たされるかどうかというのは非常に重要なことではないかと思います。親切であったかどうかという質問には、これも若干二部と一部の違いなどがありました。親切であったと感じた人は、一部で17%、普通であるというのが74%、不親切だというのが9%で、二部の場合、親切だと感じた人が8%、普通だというのが60%台、不親切だというのが30%近くになっていて、これはアルバイトを窓口においたりして、いろんな専門職としてのプロ的なものが足りないためではないかと思っております。そういった意味では図書館員の資質という、これがやはりその後学生が使うための大きな要因ではないかと思えます。資料があったかどうかという点については、多くの学生が、資料は見つかったと答えていて、見つからなかったというのは10数%でした。

そういった調査をした中で、学生たちを閉架式の書庫の中に連れていったときの感想を尋ねると、これはゼミの学生ですが、まず蔵書がたくさんあるということに大変驚かされたということがあります。その結果、読まれてぼろぼろになったりしている本が多くあるということを見て、こんなところまで自分と同じような学生が読んでいるのかという驚きですね。自分がまったくそういうことを考えもしなかったほど本がいっぱい読まれている、これは過去何年にもわたってでしょうけれども、そういうことで非常に刺激を受けているということがあります。連れて行ったために、これまで図書館との隔たりを非常に遠く思っていたのが、そうではなかったとか、調べようと思えばこれ位あれば調べられるだろうとか、あるいは知的な気分に入ったとか、そんな意見がいくつか出されまして、そういう試みをやってよかった、何らかの成果をあげることができたと感じました。

そういったことを、今日のご報告との関係で少しコメントしますと、教育における図書館の役割というのは、特に経済学関係では、社会科

学で学生たちが目を向けにくいということも考え合わせますと、教員とライブラリアンの両方、それから制度的なものと個人的なもの、この4つがクロスしたところにあるものだろうといえると思います。教員の姿勢としては、深井先生がいわれる通りだし、竹本報告にもあった通りだと思います。私たちが学生に刺激を与えていかなければならないということ、あるいは研究に裏打ちされた迫力でやっていかなければいけないということがあると思いますし、図書館へ向かわせるということは皆さんが共通して望まれていることだと思います。

それからライブラリアンの問題としては、先ほど出たようにせっかく図書館を訪れた学生が、私の調査でもかなりの学生が行っているんだけど、一回行って嫌になったとか、あるいはあまりそっけなくされると、もう少し頼みたいんだけどそこで切れてしまう、そういう意味では不十分なまま終わる可能性があります。教員の場合は動機付けを行なえるし、その後フォローもしますが、学生たちがその後図書館へ行く気になるというのは、バトンを渡すわけではありませんがその次の段階で、やはりライブラリアンに頑張っていただき、絶えずリンクしながらやっていかなければならないだろうと思います。これが個人レベルでの問題です。

制度的には、当然皆さんがたも図書館勤務あるいは教員をやっておられるかたがたですからおわかりだと思いますが、やはりカリキュラムの1年生のときに少人数教育で徹底してこういう案内ができるようにする、受験勉強の弊害をなんとか一掃していくような形での図書館利用を考えていく、特に私のような近代経済学のパターン化された部分では、特に自分で考えて自分で調べるということが少ない、パターン化した教科書を勉強するというのが多いので、なおさらそういうことをしなければならないし、それは大規模教室ではなかなかできないんで、制度的には低学年を対象にした少人数教育のカリキュラムを組んでもらうという方向がなければならないだろうと思います。それから大きいところではチューターやそのほか、図書館の場合は制度的には使いやすいシステムを作っていただく、あるいはニーズに応えるだけの豊富な蔵書をそろえていただくという、こういうことが基本として共通していると思います。

そこでお二人へのコメントですが、深井さんの方には、コンピューター利用のことがどうだということがありましたので一言述べます。私のところはまだ検索システムとしてコンピューターを持っていないので、持っていないおもちゃへの憧れがあるかも知れませんが、導入について考えますと、一つには竹本さんから報告されたように、膨大な資料を検索するにはかなりコンピューターなどを利用しないと今後は駄目であろうということです。二つ目から考えますと、学生は深井先生がいわれるようにコンピューター好きであり、最近では窓口などについて自分で折衝するよりも、そっとやっている方が好きな学生が多くて、そういう意味では下手に煩わされないでやれるということが一つの動機になるならばいいのではないかと思います。

それから自分で体系的に調べることができないということをいわれたけれども、検索の中でゲーム的な感覚でいろんな広がりを持つということも考えると一概に否定できない、むしろプラス面が多いのではないかと思います。これも後で皆さんのご意見が出ればよいと思います。それから、深井先生の図書館探検について、非常にいいという話はわかったんですけども、それでも実際には同調者が少ないというておられましたが、普及していかないその障害は実際に何なんだろうかと、これを少し考えていただきたい。少しは竹本さんの報告の中に忙しいとかいろいろありましたが、それが解決されないと、それから伸びていかないということが感じられます。

それからもう一つ、学生が何分の一かの成果があるといわれたけれど、そういった図書館利用がレポートの中でどういった成果として具体的に見てとれるか、こういったものも教えていただければありがたいと思います。ライブラリアンのお二人、細川さんの場合、制度的なあり方ということを書いておられたわけですが、それではリファレンサーとしてどう経済学教育に関与されていくか、もうひとつわからなかったもので、教えていただければと思います。

竹本さんについては、あまりいうと自分に唾するようなことになりますのでいえないんですが、多くの学生が図書館へ一応利用しようと思っていく、そういった中で学生の変化に対応するというか、非常に

学生の様変わりがある、それにどう対応しようとしておられるのか、あるいは対応されているのか、あるいは学生の心理状況によってあまり説教しないといわれていますが、そういうことでそれは済むのか、あるいは問題は出ませんでしたけれど、コピーの利用とかがどう関連するとか、そういったことをお聞きできればと思います。ちょっと長くなりましたが、また討論の中でお話しできればと思います。

司会：どうもありがとうございました。それでは続きまして、東京経済大学の鈴木さんにコメントをお願いします。

鈴木：東京経済大学の図書館の鈴木です。私はコメンテーターということですが、事例報告という形で私の大学のゼミナールのオリエンテーションと図書館のかかわりをお話ししてみたいと思います。大きくいえば利用者の教育ということですが、うちのオリエンテーションの種類と規模、あるいは時期とか時間とか、進め方、担当する職員の対応の仕方など内容にかかわること、それからゼミナールのオリエンテーションの効果を上げるためにはどんなポイントがあるだろうか、そのオリエンテーションが終わった後、一体図書館がどういうふうフォローしているかというアフターケアの問題、以上の4点について簡単に申し上げたいと思います。

まず規模とか種類ですが、いまの図書館ができて23年経っていますが、先輩に聞いたところ、いまの図書館が建つ以前からオリエンテーションは、ゼミのオリエンテーションも含めて、やっているそうです。ですから四半世紀位の歴史があると思います。オリエンテーションの種類は、どこでも同じかも知れませんが、新入生のオリエンテーションがあり、それからゼミナールのオリエンテーションについては、本学は2年からゼミに入れるわけですが、2年から4年をまとめたゼミナール・オリエンテーションと、特に4年生の研究論文、卒論を書く人間を集めた卒論ゼミのオリエンテーションというのを2本やっています。それから先生については、新任の教員は個別に、課長もしくは副課長が対応してこれもガイダンスというか、すべて歩いて説明するということをやっております。学生は、新入生は4月上旬、ゼミオリ

は5月と6月の2カ月間、卒論ゼミはダブリながら5月から10月の末ぐらいまでを設定しておこなっています。ですからクラス単位で40人位の学生がまず1年生であり、2年、3年、4年というふうにして10名から20名位のゼミ単位でやり、最後に卒論というのは個別ですから、個人もしくは同じようなテーマの2、3人というような形でオリエンテーションをやっているということです。

この卒論のオリエンテーションを特に別けている意味は、本学所蔵文献の8割位は書庫の中に入っているわけですが、書庫の入庫のオリエンテーションという形で位置付けてやっているわけです。その後1回登録した後は、自由に入出入りしてくれということで、図書館と研究論文を書いている学生の両方のロスタイムを少なくするということで進めているわけです。ゼミナールの設定とか、教授会で報告して申込書を配布してというようなところは省きます。

担当とか内容についてですが、わが大学の図書館員の年齢は、平均40台の半ばですね、場合によっては教員のかたよりもひどく若の生えた人間の方が多くて、いろんな面で教員の研究の内容とか、発表論文などを、見たり読んだりもしています。ですから教員に対する評価というのを裏では随分やっているわけです。ゼミナールに参加する教員は大体40名ちょっと、専任の教員の中の3割位です。これはどこかに問題があると思いますが、それ位の水準です。

ですからだいたいゼミナールのオリエンテーションを図書館に依頼する教員は、その学生たち自体がやはり相当勉強しますし、長い間の図書館とのつきあいがありますので、双方に蓄積があるわけです。経験と蓄積というのが先生の方にも図書館の方にもできてくるということです。閲覧サービスを担当している図書二課というところが全員課長も含めてゼミナールのオリエンテーションを担当します。これは60分から90分位でやるわけですが、それぞれの館員が過去10年、20年にそのテーマに沿って作ったものが蓄積されているレジュメを参考にしたり、不十分な申込書の場合には教員をつかまえたり、ゼミの幹事をつかまえてそのテーマについてもう少し絞り込みをやった上でレジュメを作るというようなことで対応しています。ただ最近は時間の関係もあって、ゼミナールの時間をつぶすのは嫌だということで、

終わった後の時間にオリエンテーションをしてくれ、あるいは自分がやるので結構だということで、書庫に入ることの許可だけを求めてきて自分でオリエンテーションをやる教員が少しずつ増えてきたような気がします。昔はあまりなかったような記憶があるんですが、最近はそれなりに増えてきました。ですから、そのこと自体は非常に評価できるのではないかなと思うんですが、その結果について館員の方に、あるいは図書館側に残るレジュメがないケースもありますので、その辺がちょっと注意すべき点かなと思います。

当日のゼミナールのオリエンテーションをやる場合に、教員の参加、これは非常に大きなことだと思います。これは私なんかにも経験がありますが、話している最中に、ある程度研究テーマに沿った話をしたつもりなんですけれど、学生は必ずしも的確にそこで反応があるわけではないので、これでいいですかというようなことで終わってしまうケースがあるんですが、教員の参加を求めると、その途中で軌道修正はどここの段階でもできますし、教員側の補足もできますし、それからもっと重要なことはやはり参加している学生たちの緊張感が全然違ってきます。これは後でゼミナールをやった教員たちとの懇談会を館員とやったことがあるんですが、どうしても図書館員というのは、先ほどから出ているように専門性ということのイメージがいくらかあって、書誌の説明なんかについてはある程度くわしいんですが、目録とか索引について普段あまり目にしないし使いもしない学生に非常にくわしく説明したりすること自体が逆効果だ、高度すぎて結局は具体的な対応をしようとする学生にとってはほとんど意味がない、あるいは役に立たないと先生から指摘があったりして、やはりもっとかみくだいた説明が必要なんだということがわかりました。

ただ、かみくだいた説明といっても、昔のように部屋でレジュメをもとにして講義をするというよりは、最近はオリエンテーション自体が、現場に行ってその場で説明するということが非常に多くなってきました。これは機械化の影響も大きいと思います。ですから懇談会の中で出てくるのは、実習のウェイトを増やして欲しいという意見はありますし、私たちでも実際の機械の前に立って、館員がやるのではなくて、指導しながら指一本でも触れさせる、あるいは雑索でも学

総目でも、あるいは自分の大学の雑誌の目録でも、やはり学生に自分で開かせるということが必要だと思います。それを一度でもやれば、人間という動物は慣れということで成り立っているようなところがありますから、非常に抵抗感がなくなるということがあるんですね。

効果を上げるポイントについてもすでにいっているわけですが、これは私たち自体担当者が一人の教員に長い間つくのではなくて、2、3年の単位でもって担当を変えるということで視点が異なったり、図書館側の蓄積が深まるということになると思います。ただ、ときどきテーマによっては、誰だれにやって欲しいという指名があることがあります。それから研究論文なんかの場合は、これは書庫の中に卒論の現物があり、本学は1951年の卒業論文から40年位とってあるわけです。とってあること自体がいいことかどうかは別問題ですが、その現場に行って卒論を作った人たちのエピソードとか、一年かけて清書する、いまはワープロでも提出が可能ですが、清書するだけで1年留年した学生がいたケースもありますので、そうしたさまざまなエピソードを語ったりとか、卒論を手にとって見せるとかいうことで勉学の意欲が出るということもあるかも知れません。

時期については、先ほどもいいましたように、5月から6月にかけてということが一応設定されているんですが、教員側の要求としては、やはりゼミナールが動き出してそれぞれのテーマが決まり、発表が近くなる、あるいはゼミナールが重なってきて問題意識が芽生えたところにタイムリーにやって欲しいということがあって、設定の期間を例えば年間を通して開放するというようなことは、後で課内で反省会などでは出ています。具体的に対応できるかどうかは別なんです。

専門分野の館員の研鑽の必要ということは、これはいうまでもないことです。ただ調査法というような図書館の技術的なことについては、どのテーマを選んでも方法論としては非常に同じような面を持っていますので、新聞や古い雑誌を見るなら、もちろん最初に大宅文庫へ行けというようなことが、すぐ館員としては口をついて出るわけですので、自分の持つ専門分野については、どの分野でも構わないではないかというふうに思います。館員は一応各大学の法学部や経済学部を出ていますので、守備範囲の得意、不得意というのは多少あるような気

がしますが、その辺の細かい対応はまだできておりません。

実習については先ほどいいましたように必要性は高いということです。それから最後にオリエンテーションの後のフォローについてどうしているかということですが、一つは卒論ゼミの場合は個々人のテーマですから、日常的に参考係が、本学では3人か4人位がローテーションで年間いまして、そこが個人のテーマを知ることです。その後そのテーマに沿った文献が図書館側あるいは個人でも新聞、雑誌だとか新刊書とか古書目録を見て、見つかった場合には直ちに学生に情報を提供し、場合によっては、進捗状況を聞いてみることも日常会話でやっています。これは非常に重要なことで、医者が患者を診るようなもので、個々人の名前が館員の会話から出てくると、やはり自分に対するそれなりの注目度が高いということで、勉強の意欲がでてくるように思います。

先ほどもいいました教員との懇談会、これはゼミナールをやった教員との懇談会です。これは時期の問題とかさまざまな意見が出ています。先生によりますと、かなりベテランの先生でも、自分のゼミナールの科目の必要性からいうと、本学に必要な資料の95%はあるというふうにいっておりました。ですからほとんど自分のゼミナールの生徒が国会図書館に行かなければいけないとかそのほかのことについて、それほど大きな対応がなくても相当なことができるんだと自信を持っていっておりました。ゼミナールに直接館員が参観するということも、まったく大丈夫だといわれる先生がありまして、どうぞいつでもいらして下さいということですね。先生がゼミの中でどんな話をして指導しているかということ直接耳にすることが、決定的に大事ではないかということも話し合われています。場合によってはコンパなんかにも館員が参加して学生の中に溶け込んでいる場合もあります。

もう一つは、図書館でいろいろな企画とかイベントをやるケースがあるわけですが、例えば企業博物館なんかを見学したり、工場を見学したり、その他の所を見学するイベントを企画して呼び掛けるんです。その場合にゼミ単位でそういうテーマを持ったところにまず呼び掛けて、ゼミの学生たちと一緒に出かけるということをしています。これは例えば渋谷の「塩と煙草の博物館」だとか、「東京証券取引所」だと

か、それから銀座にある「日本デザインセンター」だとか、工場では花王石鹸の工場といったところに具体的に学生と一緒に館員が出かけて行って現場を見てくるというものです。東証などに行った場合、この間の株価の暴落の問題なんかもあるんですが、館員自体が生で現場で、何万という会社の中のとった150しかそこでは取引ができていないんだというようなことが、行って初めてわかったとか、将来あそこでやっていることは形だけ残って消滅するんじゃないかとか、といったことを東証の人に聞くと、なるほどということで理解し、学生とのコミュニケーションが深くなったというようなこともさまざまな経験として生み出されています。

だいたい以上のようなことなんですが、図書館は必ずしも活字の文献で対応するというようなところではなくなりつつありますので、映像の文献のことを述べます。これについては、教員の側からも授業に使うということが非常に多くなっていますし、こういう世紀末のさまざまな社会現象とか世界の動きというものを通して非常にいい映像がたくさん生み出されていますので、そういうテレビ番組からのエア・チェックをして欲しいという要望が教員の方からあったりすることもある。館側ではそれに対応してテレビからチェックし、それを使っています。これは「図書館だより」など年3回発行するものに時々紹介したり、あるいは先生自体が指名したものを学生たちが昼休みに図書館で見ておくというようなことが起こっています。気楽にこられるための図書館作りの工夫をさまざまな面で試行錯誤しているということです。以上です。

司会：ありがとうございました。それではこれで第一部の報告とコメントを終わります。なお、シンポジウムの先生がたのご報告がもとより大切ですけれども、シンポジウムの場合は、この後の質疑応答、討論が大切です。この後のシンポジウムを実りあるものにするためにも、皆様がたのご意見、ご質問をできるだけお寄せいただければと思います。いまお書きいただければ、この後で用紙を受け取りますので、お出しいただければと思います。あるいは報告者と控室におりますので、そちらの方にお持ちいただければと存じます。

— 第 二 部 —

司会：お待たせいたしました。それではこれからシンポジウムの第二部を始めさせていただきます。始めます前に、ご参考までに司会者の米田と程島の二人で第一部の報告者とコメンテーターのコメントの様々な論点を次の三つの大きな柱にしばらせていただきました。

第一点は、学生に経済学を教育する過程で図書館をどう利用させるかという問題です。立命館大学の深井先生には、学生に図書館というジャングルをどうしたら好きになってもらえるかという図書館探険法の大変ユニークな経験談をお話いただきました。この学生の図書館利用に決定的な力を持っているのは教官であって、まず教官に図書館にきてもらうために苦心された体験は同志社大学の竹本さんがお話になりました。また学生の図書館の利用実態を日大の三宅先生は自分の教えている大学の学生からアンケートをとって、その興味深い調査結果を報告していただきました。東経大の鈴木さんはゼミナールのオリエンテーションに図書館がどのようにかわって成果をあげられたか、という報告をいただきました。

第二点は、京大の細川先生が報告されました、図書館職員の専門性とは何か、あるいはその専門家をどういうふうにして養成していくのか、という問題が現実の問題としても重要なテーマとして出てきていると思います。それは図書館職員の専門性という場合に実際の業務にかかわっての、学問分野にかかわりのないいわば共通の専門性と、それから学問分野にかかわる、いわば主題にかかわる専門性の両方が必要とされているわけですが、それをどういうふうにして獲得していくことができるのかという問題です。この点については、竹本さんや鈴木さんがふれました。

第三点は、図書館とコンピューターのかかわりの問題であります。最近のコミュニケーション分野における技術革新は日進月歩でありまして、いまや図書館でも活字文献だけでなく、ビデオとかCD-ROMといったような映像のメディアがどんどん入ってまいりました。これと関連いたしますが、以前から図書館にコンピューターが取り入れら

れ、これを利用して館所蔵の文献・資料を検索するシステムが普及してまいりました。さらに学術情報センターによる NACSIS のような情報ネットワークも形成されてまいりました。コンピューター検索の問題については今日の報告の中でも、意見のちがいが見られたと思います。この問題をどういうふうに考えていったらよいか、これもまた、大事な問題だと思います。もちろん、そのほかにもさまざまな問題があるかと思いますが、だいたい、そういうふうな3つの柱について、そのそれぞれについて、ライブラリアンと教員とが、協力、共同していくことができるのか、あるいは、その協力、共同ができない原因は何なのか、これがそれぞれの3つの課題について問題になってくる、こんなふうに考えております。このことについて深めることができればよろしいのではないかと考えております。

まず、先ほどの2人のコメンテーターのかたから、報告者に対してご質問を含めたご意見が出されておりますので、それに対するお答え、補足を3人の報告者のかたに最初をお願いしたいと思います。深井先生をお願いします。

深井：三宅さんから私に3点質問が出ています。3分では時間が足りませんので、勝手にはしります。やや挑発的に問題を出しますが、コンピューター検索の長所、短所といたしますか、これをどう位置づけるかという点でいいますと、私は、コンピューターは文献検索の補助手段であって、主要手段ではない。とりわけ、図書館利用の入門的教育において、初めからコンピューターを使わせるのは間違っているというふうに断固いいたいと思います。いまのままではコンピューター検索は、利用者の怠慢と職員の手抜きを促進する手段になってしまうと思います。いきなりコンピューター検索から入った学生は、きちんと図書館のシステムを知ろうという努力を簡単に初めの段階で放棄します。結局、図書館好きにも、図書館通にもなっていない。これが学生のレポートを読んでよくわかります。

第2点、私の図書館探険が普及していかない原因は、これは、教員の側に問題がありまして、自分の同業者の悪口でもあり、私自身の反省につながることであるので、なかなかいいにくいことですが、

私は大学教員というのは、最も怠惰な人間になる職業じゃないかという感じがしています。学生一人一人に、自主的な個別的な創造的な勉強をさせるというのは、教員にとって大変な負担をとまなう。だから、決まった教科書を読ませ、教員の指導できる範囲で勉強させることが一番楽だという根深い通念が教員の中にあるような気がします。自主的な勉強をさせるというのは、一人一人の学生の問題意識のありよう、その展開にしたがって指導していかなければいけない。これは、いまの私学の教師が持っている労働環境、学生の数とかそういうことからすると、一般に要求するのは、かなりきついなとは思っています。そういう意味で私は、教員個人でイニシアティブをもって対応できることには大きな限界があって、その意味で、図書館のシステムと教員個人との連携が必要なことを切実に感じます。

私の探求の成果が現れているかどうかを学生がどう受け取っているのかというのは、レポートを読んでいるとよくわかります。丁寧に書かれたレポートを読みますと、失敗の悔しさと成功の感動とがおりまぜになって出てきますが、やっぱり、原始的な苦労を通じて得た喜びというのを読むと、これは、まちがいに図書館のファンが一人増えたということを実感させてくれます。4分の1の学生は非常にいいレポートを書いてきます。いいというのは、成功、サクセスではなくて、失敗の連続なんです。最後の段階までやり通して、これからも図書館を使うとやはりいっています。これは信用していい本人の感想なのではないかと思います。

司会：それでは細川さん、どうぞ。

細川：先ほどいいましたように、約5年ほど前から、特別講義で経済資料調査論というのを担当しております。これが、いわば経済学教育の一つだろうと思いますが、自分の体験をもとに講義したらいいんじゃないかという、安易な気持ちもありましたが、さっそく、いろいろな参考資料を調べますと、それに該当するようなものがなかなかないのです。そこで『経済資料研究』で今日もきておられます中村弘光先生

が紹介された, “Information sources in economics.” (2nd ed) というフ
レッチャーというかたの書いた書物を参考にして始めたわけなんです。
だいたいその内容は, 主題選択と書誌を重点にしております。最初は
図書館案内, そして, いわゆる一般教養のデータ・ベースで, 経済学
部のわれわれがいま使えるものの検索実習, それから, 一般的な書誌,
専門書誌の簡単な解説, それから, 経済雑誌論, 統計資料, 会社経営
資料論と続き, できればそういう文献のデータ・ベースを構築する技
術論というものをやるという内容であります。しかし, 講義に出てく
る学生は, 大きく学部学生, 大学院生, それから留学生で, それぞれ
のニーズがちがいますので, あまりくわしくやれば皆, 次のときには
出てこないということが起こりますが, まあ, そういった講義の内容
で, 図書館的なところを何とか専門化して話したいということでやっ
ています。それを, われわれの専門職員としての仕事のひとつとしてつ
け加えさせていただきたい。この講義を担当した話は, 10月の経済学
教育学会の全国大会で報告させていただきました。いずれ, 詳細は公
表したいと思っています。以上です。

程島: それでは竹本さん, どうぞ。

竹本: 学生の変化, 様変わりにどう対応していくかという質問が出たの
ですが, 率直に言って, 充分対応していません。一つ経験をあげます
と, ゼミの学生からのガイダンスを先生から頼まれて, 5 回ほどやっ
たんですが, そのうちの 4 回は, 学生の反応から見て, 明らかに失敗
をしています。聞いている学生が, 非常にしらけているのですね。そ
の 4 回とも, 担当の先生とだいたい 2, 3 時間は議論をして内容を組
み立てているのですが, 全然駄目なので, 5 回目のときに, そのゼミ
の学生 2, 3 人と一緒に, やはり 2, 3 時間遊んだんですね。それで,
先生の悪口も含めて全部聞き出しました。そして彼らの関心, あるい
は気分にあわせて組み立てたのがその 5 回目なのですが, そのとき初
めは先生はかなり首をかしげていました。そういうやりかたはどうか
というので。ですが, そのときだけが成功しました。全部 5 回とも終
わったあとで, 学生に反応を聞いているのですが, 5 回目だけは反応

がよかったのです。

それから、もう一つ図書館としては、学生が図書館で、わいわい、わいわい、しゃべってしょうがない。どんなに静かにしてくれといってもしゃべる。これは、教員にいろいろ授業状態を聞きましたら、だいたいゼミが、班に別かれていて、班ごとに共同研究させて発表させている。したがって、必ずグループできて、グループで討論している。かなり優秀なゼミですと、想定問答集まで作って、お互いに敵、味方に別かれて討論すると、そういう予備演習のようなことをやっているということで、これは黙らせるわけにはいかないということがわかったわけです。黙っているのは準備ができないと。したがって図書館の一角にいくらしゃべってもいいという場所を作って、開放しましたけれど、そこは資料のない所なのです。やっぱり資料のある場所でしゃべる方がいいわけで、もう、これは仕方がないかなと思っていますけれども、どう対応したらいいかよくわかりません。それから、電卓や、パソコン、ワープロのノート型を持ち込んできて、音をたててうるさい、という苦情もあります。これも一部の学生からは静めてくれといわれていますけれど、どうしたものかなと考えています。

それから、コンピューター検索の話がちょっと出ているんですけども、現在のデータ・ベースの状況からいいますと、ものによってはちがいますけれど、日本のもので、一番ひどいものは、NACSISの目録所在情報だと思います。かなりデータが不正確不十分で、入っているデータにも限りがあります。それから、検索の仕方にも限度があるということがありまして、それぞれのデータ・ベースに特有の限界、何年からデータが入っているかとか、データの質がどの程度に正確かに違いがありますので、かなり検索をして慣れて、そのデータ・ベースの限界を熟知した上で利用するならば、非常に便利なものと思っています。ただ、不特定多数の学生にそんなことをどうやって徹底するのか、これは皆目見当がつかないので、現在の段階では一応一定の指示をして、コンピューター検索はさせますが、後もう一度カウンターにこいといっって、どういうコマンドでどういうキー・ワードでどういうふうに検索したかを見まして、その結果を学生と往復するということをして、体験上、その限界を知ってもらおうということはしています。

したがって、偶発的なものですから、不特定多数の学生に説明するということはしていません。そういう一般的な説明は一番面白くないから、しても仕方がないのではないかと考えています。

それから、主題知識、資料知識の問題ですけれども、先ほど、鈴木さんの方から、調査法はどれでも同じかという質問があったのですが、原則的にはどれでも同じですが、その学問分野の性格によって、固有の探し方なり、いろんな問題があると思います。辞書一つにしても、どういう立場で編纂されてどういう特徴をもった辞書なのか、学生が何のために利用するのかに応じて、その中から一つを選び出すのか、あるいは、それぞれの事情を説明して学生にこういう辞書がありますというのか、いろいろな答え方があると思うのですけれど、こういうことまで知らせようと思えば、相当なことが要求されるわけです。そんなことが、短時間でどうやって図書館員に獲得できるのかということ、僕は答えがわかりません。単に経験で蓄積をするのか、しかし、経験だけですと、ばらばらの知識ですので、何らかの体系的な基礎知識は必要だと思っています。

現在の所では、できればそれぞれの専門家に一定の時間、図書館員を対象に講義、研修をしてもらうということが必要だと思っています。しかし、講義をしてくれる先生は、その研究の専門家であっても、ライブラリアンに何が必要かということは、必ずしも正確に把握しておられないので、その講義がわれわれに役に立つかどうかというのは、極めて偶然に支配される。できれば、その先生の特徴をよく知っていて、役に立つ講義をしてくれる先生を呼ぶよりしょうがないかなと思っています。本当は図書館員が、全員ではなくても、一定の人が十分に勉強をして知識を身につけて、図書館員のために専門の基礎知識を講義するというのが一番望ましいと思っていますけれども、そうするためには、どうしたらいいのかということは、よくわかりません。現在、僕自身が思っているのは、制度的に教員と組織として交流するだけではなくて、どんなにそれをやっても充分ではありませんので、やはり、インフォーマルに、私が個人として仲のよい教員を作り、聞きやすい条件を作って、何でもフランクに聞くということでカバーをしています。お返しとしては、どんなに面倒な調査でも徹底してやって、

草の根をわけても探し出して、その教官に提供をするということをやっています。以上です。

司会：どれかのテーマからとりあげてやろうと思ったのですが、お3人の答えが3つの分野にわたっております。それで、逆にコメントターの側からそれぞれ反論、意見がありそうですので、テーマを限定しないで、柱としては先ほどのようなことを踏まえて、少し討論していただき、その後で論点を整理していきますが、あまりそれにこだわらずに、皆さんの方から質問なり、ご意見がありましたら、手をあげていただいて、積極的に討論に参加していただければと思います。まず、コメントターの三宅先生から。

三宅：最初に申しましたように、基本的な考えかたでは一致しているわけで、あまり問題にはならないと思うのですが、一つ先ほどからかみあわせたいと思うのは、コンピューター利用ということです。深井さんと、それから竹本さんがいま限界を説かれました。で、コンピューター検索システムを利用すると、図書館のシステムを知ろうとしない、ということでいかんといわれるわけですね。私は、確かに学問の深さを知るためには、無駄をし、苦勞しなければ、実感としては分からないとは思いますが、学生の本来の目的は本を読むことであって、図書館のシステムを知ることではないから、もし簡単にコンピューターで探し出せるなら、それはそれでいいのではないかということが反論としてあります。

それから、データの質、量面での限界があることを熟知した上で使用しなければならないということは当然のことであり、フィールド・ワークしてゆく体験が学生に必要であること、こういったことの必要も当然ですが、そういったものを通して、コンピューター検索システムが発展していかなければ、これも限界があると思います。長期的に見るならば、このコンピューター検索というものを否定するわけにはいかないから、ここでそういう失敗事例、限界をとらえながら、やはり大胆にやっていかなければいかんだろうと思います。例えば、辞書についていくつもあるというのがコンピューターでわかった。その立

場によってちがう同類の辞書を、それを両面から調べさせるようにしたり、そういうことで限界のある部分もかなりカバーできるだろうと思います。そして、質、量ともに毎年ずっと変化してゆくわけですし、量的にも何年までしかわからないということも段々改良されていきますから、時代的趨勢、人間の合理性からいって、あるいは手抜きということがあるでしょうが、手抜きでも結構じゃないかと、手抜きをしてそれがほかのサービスにむけられるならば、これは大いにいいじゃないかと、これがコンピューターに関してまず議論をかみあわせたい点です。

鈴木：竹本さんの様々な意見が参考になるのですけれど、私たち参考係はデスクに座っていて、墓堀り人夫だなんて毎日回りの人間にっています。毎日学生が持ってくるテーマを恥をしのんで、穴を掘ってそこに入りこまなければいけないという状況です。現実のやっている学問については、現役の図書館員より学生の方が進んでいると思うんです。例えば、研究論文を書く人間でも、資料を検索するというよりも、本を読んで論文を書こうとしているんですから、数段進んでいる場合があるわけです。特に専門用語を駆使されて話をされますと、その求めているものが何なのかということが、ものすごくわかりにくいんです。どうして、横文字ばかり使うのか疑問な面もあるんですけれど。

ですから、目標やテーマについては、さっき深井先生がおっしゃっていたように、手作りのウェイトをできるだけ高めるという意味では、ある自分の守備範囲の中であたえられる量とか、ある程度の質を持った量を与えるということではありますが、学生の要求に対して一番的確な資料をその学生に与える必要があるのかということは、館員の話の中でも疑問が出ています。そんな答えを出すようなものは、図書館員との対応では不必要だと。何ととってもやはり教員が指導をするんですが、やる主体は学生だということで、その学生が何らかの動機づけは自分でしなければいけないことですから、そういう雰囲気にするような手段があればいいのだと思います。

ですから、さっきいった経験とか蓄積という点では、かつて日比谷図書館で出したもので、これはいいなと思った事例研究などは件名で

引けるようになっているんですね。長年、10年20年とやった、様々なレファレンスの蓄積を件名で、言葉でひけるようにしてあります。そこで、学生がきたときに、すぐその過去の蓄積がどうなっているかをその場で示すことができる。学生に対してのサービスを徹底するという意味では、質問をされて初めてそこで何か生ずるというのでは手遅れだと思いますので、時間のあるときに、そのものに対して蓄積をしていくということをやらなければ、やはり図書館側の手作りの対応の質が問われるのではないかと考えています。ただ単に待っているというのがサービス業ではないと思います。

卒論については、教員に聞くと、やはり10名位を越えては、一年間で研究論文の指導はほとんどできにくいといっていました。ですからこれは教員側にも大変な負担だと思いますので、私は一概に教員をせめる気は全然ありません。負担がものすごく大きいし、会議が山のようにありますから、一体全体、研究と教育を両輪にしてやっている先生がどの位いるのかということが、非常にいまや疑問になっています。感想としてはそんなところなんですけれど。

竹本：図書館職員の専門性についてちょっと。プロとして当然、図書館職員としての姿勢というか、情熱というか、対応のしかた、親切さ、そういったことが一方であり、そしてもう一つの専門性というのは、経済学の図書館の職員であれば、経済学について専門をかなり知ることだろうと思います。また、これは、議論をまき起こすために一ついいますと、僕は図書館の職員の人たちは、中心は学生に対する親切さとか情熱とか、そういう姿勢がやる気を出させるのであって、専門的な知識を知っていて、ああだこうだと教えるよりも、学生が自分の足でやるという、深井先生のあれでいえば、自分でそれはやる方がいいと思います。なるだけ早く探すためには、専門の内容でいってもらった方がいいんだらうけれど、基本は丁寧に、あるいは情熱を持って学生に接すれば、学生は自分の専門知識をもとに、自分で探し出していくだらう。そういうことで専門性については逆説的ないいかたをすると、むしろあまり必要ではないのではないかと、もっと広い視野という方が必要ではないかということを、問題提起としてちょっとい

っておきます。

司会：問題を整理しながら進めたいと思います。コンピューターについての問題の論点ははっきりしてきたようですが、実際にコンピューター利用が進んでいる大学図書館がいくつかあると思うので、そういうところでいまのお話はどうかということをお聞きしたいのですが、どなたかどうですか。それではここだけで問題が全部解決するはずがありませんので、一応そのことはそれだけにして、専門性の議論がかなりありましたので、もうちょっと、報告者とコメンテーターとの間で議論していただきたいと思いますが。ご意見はありませんか。

深井：僕は図書館の職員が学生に、いまやっているテーマに一番適切なツールを示していただく必要はないと思う。本の探し方について、僕のような素人が苦勞してガイドブックなんか作っていますけれど、そのところでアドバイスをしてほしい。やはり学生が自分で探して、自分で見つける喜びを持ったときにそこを試行錯誤していく、喜びと苦勞というのは背中合わせだと思うのですけれど、そういうレファレンスというんですかね、職員にはその専門家になっていただきたい。最後にどの文献が一番いいかどうかは、教員も100パーセント的確なアドバイスができるわけじゃない。やはり、学生だと思うんです。自分で自分のもやもやしていることに一番びったりしているものを自分で手にとって探していくんだと思うのですけれど、探し方について血の通ったプロとしてのアドバイス、レファレンスをしてほしいなあと思いますね。

うちの大学の場合でいうと、図書館職員の専門性を大学全体で認めませんから、どんどん配転していきますし、やはりそれは望みようがないんですけれど、東京経済大学の話や、同志社大学、というよりも、竹本さんの話を聞いていると、これも突然変異的ななあ、うらやましく思うんですけれど、それが図書館全体としてやられたかどうか。僕と三宅さんの論争にしても、僕はコンピューターを否定はしていませんし、要するに、学生がそれぞれ能動的に図書館を利用していく習慣というか、どう高めていくかということだと思うのです。その点は

図書館職員のかかわり方も、同じ面から議論していくことがいいのではないかと、素人ながら思います。

司会：報告者と討論者が何か突然変異の集まりみたいな気がしてきましたが。いまのことについてほかのかた、どうでしょうか。

竹本：僕もライブラリアンが学生に専門分野の内容を教えるなんてことは、全く考えていません。そうじゃなくて、収書にしても、整理にしても、閲覧サービスにしても、できるだけ確にサービスを展開していくためには、自分自身が専門性を持っている必要があるとは思っています。しかし、それは専門家のための専門知識とは全く違うものです。何がどこまで図書館にとって必要かということを、合理的に獲得する道を何とか日本で開いて欲しいと思っている理由は、そこにあるわけですね。ですから細川先生を呼んで、今度京都で統計の講義を集中的にさせていただくことになっていますが、先生は現場にもタッチしておられるので、多分われわれの需要に応えられる8時間の講義をしていただけたらと思うています。ほかの統計学の専門家と呼ばなかったのはそういう意味ですが、自分たちがサービスを提供するのに、より早く、よりの確に判断をする、あるいはどういう手続きをとった方がいいかということを知りたいために、各学問分野にそれぞれ固有のことがありますので、それを知りたいという意味です。したがって、レファレンスの回答でも、答えではなくて、どういう経過をたどって調べるかということを基本的には教えて、答えは学生に見つけさせるというふう風にわれわれはしてきました。

細川：最初に、図書館員にも専門性を要求するということをいいましたが、実際、レファレンスの活動というか、われわれのしている仕事というのは、いまいわれましたようなことで、決して最終回答を提供するというようなことはいっておりません。ただ特につこんでいくという場面があるとすれば、統計資料とか、政府刊行物とかそういった所ではそうとうつこんだところまで案内してやらなければならないだろうと私は考えております。恐らく、理論研究とか、そういった分

野にかかわっているものについては、そういう書誌類などを絶えず、新しく出されたものを勉強していかなければならないのではないかと考えております。しかし、いつも時間がないので、私自身の講義の中でもあるところまで出して、後は喫茶店でお茶を飲みながら、君は何を選択しているのかと聞いてごまかす、というようなことをやっております。そういう意味では専門性といいましても、確かに限界があります。

ただ私がもし、そういうものに要求があるとすれば、いま経済学の分野では是非学界動向というもの、なるべく昔、恐らく『経済評論』でやったようなものを、それには長所と短所があったと思いますが、そういう学界動向や研究動向をどこかで出してほしいと思います。われわれは、大学院の職員たちとか、あるいは学生なんかには、書評などを読んで、ちゃんと研究動向をつかんでおきなさいといったりしていますが、やはりいまの様々な方向に展開される経済学の分野を全部カバーすることはわれわれの手におえません。だから新しい研究動向というものが、1年、あるいは2年に1回ということでもいいのですが、そういうものを出していただければありがたいと思います。

司会：ほかのかたいかがです。皆さんこういうふうにという理想的なことをおっしゃっていられると思いますが、実際には、それを阻んでいくというか、なかなかそういうふうには動いていないというところが本音としてあるはずだと思いますね。そこがもう少し出てくるとよいのではと思ってさっきからお話をうかがっていますが。あるべき姿としてはこういうものだというのはわかるんですが、それは実際にはなかなか実現しがたいところがある。そこのどろどろした話が出てくると、もうちょっと深まるのでは、という感想を持ちながら聞いているんですが、いかがでしょうか。

このテーマは経済学教育学会の方でも先ほど三宅さんも、ちょっと紹介していらしたんですけれども、あんまり考えていなかった新しいテーマで、経済学教育学会としても長期的に追求しなければならないテーマを、今日はこういう形で議論していただいたと思っています。恐らく、経済資料協議会としても、図書館あるいは資料室等々が大き

く転換をせまられているいまの状況の中で重要な問題なんだろうと思います。そこで、いいだせばきりはありませんが、そういう中の議論のトっかかりを作れたのではないかと思います。今日、こういう議論をお聞きになって、川原先生にご意見をお聞きしたいんですけども、いかがでしょうか。

川原：突然指名されてたいへん恐縮しております。私は3年前に名古屋大学をやめまして、資料協議会もそれまで30数年、活動に参加させていただいておりますが、それ以後は個人会員として参加していますので、もう現場の第一線から身を引いておりますから、今日は特別に発言させていただく資格があるとは思いませんけれども、シンポジウムは非常に時機を得たテーマで、皆さんが発言されたことを興味を持って先ほどから拝聴させていただきました。今日の先生がたのご報告や討論とかみあうようなお話ができるかどうか、自信がございませんけれども、私がいろいろ考えていることを少しお話しさせていただきます。

私はじつは、名古屋大学の経済学部に関わり続けていたけれど、最後の4年間に中央図書館の専門員という仕事をやりまして、そこをやめましてから、三重大大学の人文科学部に司書コースがありますが、その主任教授をたまたま私の友人がやっているものですから、暇になったのなら、自分の仕事を手伝ってくれないかといわれ、書誌解題を担当させていただいて、いま現在、3年目になりました。そこで、司書資格をとるための書誌解題の講義ですから、そうたいした講義ができるようにカリキュラムが組まれているわけではございません。図書館法で定められております趣旨の講義は2単位ですので、2単位30時間という時間の中で、自然科学から人文科学、社会科学、全部こなさなければいけませんので、そうたいそうな講義ができるわけではありません。が、この講義をさせていただくようになってから、それ以前から考えていたことですが、本日は経済資料協議会が主催ですので、経済学と図書館というタイトルになっていますが、これは、どのサブジェクトにも通用することでありまして、文学教育と図書館でも結構ですし、あるいは農業経済学と図書館でも何でも結構なんです。要する

に、主題教育に対して図書館員の受けもつべき役割が、果していまの司書の教育制度の中から、生まれてくる可能性があるのかどうかということに非常に関心を持つようになりました。

日本には二つちゃんとした図書館大学ということで、慶応大学文学部の情報図書館科と図書館情報大学とがありますけれども、後はおおむね、三重大大学のように、単位数の限定された、全単位はここでは授業できませんので、ほかの所で補講を受けて全単位を取得するということになりますけれども、不完全なコースを備えたところでありたいというのが日本の司書教育です。アメリカ、ヨーロッパと比べると、非常にまだ貧弱でして、rare booksとか文書とか専門に細分化されたコースを持つことが、アメリカの図書館学校などと比べると、できないという仕組みにもともなっているんですね。それで結局、専門職員になれる資質をもった図書館員がどこから育ってくるかという、本来ならば、その司書教育のところから育ってくるわけです。そこに日本の一つの大きな隘路があると思います。

それから、もう一つは先ほどからのお話にもいろいろ出てきておりますが、コンピューターが取り入れられるようになってから、大きく様変わりしてきているということでございます。これは、図書館情報の世界だけではなくて、物的生産の現場で、コンピューターが入りましてから、大革命が起こったわけですが、大ざっぱにいいますと、生産の世界から、職人芸というのが追放されてしまうわけです。それと同じことが情報の世界でもいま起こりつつあるのだと私は思うわけなんです。

図書館員というのは私は、基本的には本当は職人なんだと思うんです。その点では、深井先生のご立論に基本的には個人的に同調申し上げますんですが、本当のプロというものは、もともと職人から育つものだと思っています。ところが、いまの生産、物を作る世界から、職人というのが圧迫されてきているのと同じ現象が図書館の場合にも起こってきていまして、職人的なプロの図書館員が育つ基盤が現場に非常に欠けてきております。これは、個人的な努力をもってしてもいかんともしがたいという全体的な状況がございます。もちろん、非常に資質のすぐれた図書館員はおりますし、それぞれの現場で例えば、東

京経済大学の鈴木さんの所で試みられておられますこととか、竹本先生がお話になられましたような、個別的なすぐれた努力というのは、あちこちの図書館でももちろんなされています。そして、それなりにすぐれた図書館員が要所要所に存在していることも事実なんです、これが、目に見える形で育ってこないんですね。日本の場合にはそういう基盤が欠けているんです。

私が三十数年前に図書館に入りましたときは、いまのような司書教育の制度も全くありませんし、私自身も図書館の仕事については、ど素人以前の状態で入ってきておりまして、たまたま図書館の仕事をするようになったという形でしか参入しなかったのです。そこからどうやってまあ半人前くらいの図書館員になったかということを考えてみますと、私の先生は皆さんお名前をご承知のことと思いますが、水田洋という大変な文献マニアの先生がおられます。この先生が私の直接の師匠であります。それから、経済資料協議会に参加しましてからは、細谷先生とか、杉本先生、本日は病気で参加しておられませんが、前の理事長でありました京都大学の前田さんとか、神戸大学の生島さん、こういう諸先生に育てられまして、やっと半人前の図書館員になったわけです。

結局やはり、深井先生が学生にお教えるポイントにしておられる、自分の足で歩いて文献を探すということが基本だったわけですね。とにかく1日に何回、何十回となく書庫の中に入って文献を探すということをどれだけやったかわからない、そういう毎日の繰り返しの中から、図書館員として育ってくる。しかもそれは同じ現場で、同じ沢山の顔なじみの先生がた、顔なじみの学生、学生は4年に1回で去ってしまう通過客ですが、大学院の学生は長くおりますので、そういう顔なじみの人たちの交流に支えられて、ウィスキーが熟成されるように、次第次第に図書館員の道をアップしていくという、こういう過程をとって図書館員が育ってくるわけです。恐らく、天野先生の時代もそうでしょう、例えば、天野先生と川上肇先生の関係、そして、お名前をあげて恐縮ですが、細谷先生と大塚金之助先生の関係、私自身のことを申し上げて恐縮ですが、私と水田洋先生との関係、そういう非常に幸福な教官と図書館員との関係がありまして、そういう先生が

たに育てられて図書館員があったんですね。

ところが、いまの現場では、研究者が図書館員を育ててくれないんです。そういう研究者がいなくなってしまった。それが一つの大きな原因ではないかと思います。そういうところへコンピューターが入ってきました。私が知っている、20代から40代位の図書館員の人たちは、個別的に見ますと、それぞれ決して資質が劣っている人たちだとは思いません。むしろ一般的にいいですと、私が若かった時代に比べて、はるかに優秀な人たちが、図書館の中に入ってきていますし、彼らは一般的な教養も身につけているし、2、3年で、図書館内のスタンダードな問題を処理するだけの能力も持っていて、資質は非常に恵まれているんですが、不幸なことに、教官と学生との非常に幸福な関係を持っていないんです。そういう研究者、あるいは学生との接触を通じてのみ、本来、図書館員というものは、育っていくべきものと私は思うのですが、そういう関係がこの大量情報時代になって、次第に失われてきている。

それともう一つの原因は、今日の先生がたはその点にはどなたもおふれになりませんが、日本の場合は、専門職というのがどうも、日本社会全体の共通の傾向として、管理職よりも一段下に見られるという傾向があります。その傾向が図書館の人事政策に濃厚にあらわれておりまして、管理職を養成するために、図書館員を一定の場所に定着させないという人事政策が支配的なんです。これは国立大学ばかりでなく、ほとんどの私立大学で多分そうだと思いますけれど、3年ないし、5年くらいでどんどん職場を替えてしまうんですね。しかも、図書館でないところに職場を替わるということも、しばしばあります。

こういう人事政策をとるかぎり、プロの職員というのが育ってこないのは当然なのでして、こういったいくつかの原因があって、図書館の専門職員が育ちにくいという現状がございます。これは、ヨーロッパとか、アメリカの状況と比べますと、日本は特殊な状況におかれているように私は思います。文化的インフラストラクチャー全体から見ますと、日本の場合は極端に”小さな政府”主義でやっておりますので、図書館員とか、美術館で働く人たちの数が非常に少ないんですね。欧米の場合は、一般的にいて、遥かに多い人たちが、そういう

職場で働いております。そして、一般管理職を目指すコースと、専門職を目指すコースとはっきり別かれておりまして、専門的な仕事に携わる人も、財政難の現在でも昔と変わらない位人数が多いし、事実そういう人たちを養成する方法や現場に事欠かないというシステムがございます。その点が、日本は図書館員の意識や努力だけではどうしようもない状況があって、いつまでたってもプロの図書館員が出てこないという一つの大きな原因になっているのではないかと思います。

ちょっと、お話が長くなって恐縮ですが、私が三重大で最初に講義をするときに、30時間で、自然科学、人文科学、社会科学全部をどういう方法でやろうかと思って、少し考えましたけれども、結局のところ、手抜きをしないでやってみようと決めまして、大学院の学生向き位の水準のテキストを作って、とにかくそれをわかってもらわなくてもやってみようと決心いたしました。受講生は、全部で10人から、15人位しかおりませんけれども、とにかくあらゆる語学の文献を、書誌ですら日本語の文献だけを講義するわけにはいきませんので、ロシア語から、オランダ語から、ノルウェー語から全部出てきますが、翻訳なしで、ぶっつけ本番でぜんぶやってみますと、最初はもうまったく通じない状態ですけども、やっているうちに、学生が非常に熱中してまいりまして、最後の試験のときに一体どの位ついてくるのだらうと思って、楽しみにしておりますと、15人中3割位の学生は、きちんとポイントをつかんで答案を書いてくれるんです。だから、やり方によっては、昔ながらの方式が通用するんだと、私は実感いたしました。それ以後その方法でずっとやっております。

ですから、いまの学生でも、それから若い図書館員でも、昔の旧式のやり方に興味を持っている人、そして実際にそういうやり方に接触した場合に、それに反発しない人は存外いるのではないかと思うのです。基本的には、学生にせよ図書館員にせよ、やはり教育の仕方というのは、足で歩いて自分で文献を探す、それが私は基本ではないかと思っております。たいへん勝手なことばかり長々と申したてて失礼いたしました。

司会：貴重なご意見をどうもありがとうございました。会場の方から、

質問が一点まいっておりまして、今日は図書館と学生教育一般の論議がなされたのであって、経済学固有の問題が出ていないのではないかと。今後、経済学教育固有の問題点を出すことが、これからの議論、検討にとって必要だという、こういうご意見でございます。これは、今日はとてももう時間がございませんので、今後の貴重なご指摘として、うけたまわらせていただきたいと思いますけれども、経済学教育学会として、一言だけいわせていただきます。経済学固有の問題にいく前の学生の問題であるとか、いまま川原先生から、コンピューターの話が出ましたけれども、そういう大きな変化とか、そこのところで非常に悩んでいる、特に教育学会としては、学生の変化に非常に悩んでいる、というのが正直なところなんです。これから、研究と教育の両方にかかわる経済学固有の問題を今後とも議論していきたいですし、こういう場で何かご報告ができればよいと思っております。

それでは、時間がありませんけれども、最後にこの討論のまとめを、細谷先生にお願いしたいと思います。

細谷：いまままとめとおっしゃいましたが、これをまとめる力は私にはとうていございませんので、最後にちょっとだけ挨拶をさせていただきます。どうも今日は長時間にわたりまして、報告者、コメンテーター、司会の皆さんにお話をいただきまして、ありがとうございます。この壇上を借りまして、皆さんに厚くお礼を申し上げます。

それで、司会の米田先生もおっしゃいましたように、これは実は初めての試みでございまして、協議会と経済学教育学会と大図研の三者が予め準備の会合を何回か持ちましてプランを作って今日のシンポジウムの開催にこぎつけたわけでございます。どうなるかと思っておりますが、私の感じでは、第1回としましては、どうやら成功したのではないかと思います。これは、ご存知かもしれませんが、『経済資料研究』で、このシンポジウムの小特集号で出すことになっておりますので、そのときには、先生がたはいい足りない点は十分に補足いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。それから、これはあくまで第1回の試みでございまして、いまご質問がありましたように、経済学教育の中身にふれる機会がちょっと少のうござい

ましたが、これにつきましては、経済学教育学会では、今度の第7回の福島大会でたいへん議論をしております、そのプレプリントも全部ございます。ですから、そういう向きのかたは、米田先生の方に聞いていただければ、そういう資料もいただけるのではないかと思います。

最後に一つだけつけ加えさせていただきますが、それは文献・資料の収集ということです。現代の世界の情況は、東西ドイツの壁がなくなってから私たちが想像もつかないスピードで動いております。それにとまってというか、学問の方がそれに追いつかないわけですが、経済学もどんどん変わってきて、経済学とほかの社会科学との境目がだんだん曖昧になってきております。その中でそれぞれの大学でどういう文献や資料を収集したらよいかという問題が非常に大切な問題になってきていると思います。コンピューター検索も私も否定するわけではありませんが、いくら検索してもしっかりした文献・資料の収集がなければ意味がありません。そういう選択をするのは、結局やはり私は教官の先生がたと図書館員の協力以外にないと思うんですね。この問題は、細川さんも提出されておりますし、竹本さんも言及しておられましたが、そのためにはどういう工夫をしたらよいか、今日は時間がございませんので、また改めて皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

司会：それでは、これで40周年記念シンポジウムを閉じさせていただきます。皆さん、長時間どうもありがとうございました。